

Title	アメリカ啓蒙と宗教
Author(s)	梅津, 順一
Citation	聖学院大学論叢, 16(2): 11-27
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=156
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

アメリカ啓蒙と宗教

ジョン・ウィザースプーンの場合

梅津 順一

American Enlightenment and Religion: a Case of John Witherspoon

Junichi UMETSU

John Witherspoon (1723-94) is known as the lone clerical signer of the Declaration of Independence today. Before emigrating to America in 1768 to become president of the College of New Jersey (now Princeton), he served Scottish parish and made a name for himself within the Popular party. He published satires on the affectations of manner, the laxness of doctrine and the preference to morals among the Moderate party. In America he would become for establishing the same concerns with rhetoric, literature and moral philosophy as the Moderates within the American College. Largely on the analysis of his *Lectures on Moral Philosophy*, this paper tries to clarify his discussions on the relation between piety and reason, the theory of resistance, and the American liberty.

はじめに

かつて啓蒙といえ、18世紀のフランス思想を指すと考えられていたが、今日ではさまざまな国々の啓蒙思想が、それぞれの政治的、文化的、社会的条件に即して検討されるようになった。⁽¹⁾ アメリカ啓蒙もさまざまな角度から検討されているが、ヘンリー・F・メイの古典的研究『アメリカにおける啓蒙』は、啓蒙と宗教の関連を問う中で、アメリカの近代思想の原型を探求している。⁽²⁾ すなわち、19世紀のアメリカ思想史は、一方における「道徳的な確実性があるとの信仰」と、他方における「変化と進歩が望ましいとする信仰」の妥協の過程であったが、その思想の根源は18世紀アメリカのプロテスタンティズムと啓蒙思想の関係に由来するというのである。⁽³⁾ 自由と進歩と理性を評価するアメリカの啓蒙思想は、プロテスタンティズム、とりわけカルヴィニズムとの関りを通して、アメリカの思想的伝統を作り出したと考えられるわけである。

もとより、メイがアメリカの啓蒙思想というとき決して一様ではなく、ヨーロッパの啓蒙思想の影響を受けたさまざまな潮流が念頭におかれていた。第一は「穏健な啓蒙」であり、これはロック、

Key words: American Enlightenment, John Witherspoon, Scottish Moral Philosophy

ニュートン以来のイギリス思想に特徴的な、バランスと秩序と調和を重視する立場である。第二は「懐疑的啓蒙」であり、18世紀半ば以降のパリを中心とするフランス啓蒙、とくにヴォルテールの立場がこの典型である。「懐疑的啓蒙」はアメリカでは、それほど大きな広がりをもたなかった。第三は「革命的啓蒙」であり、いわば啓蒙の光の下で新しい政治体制を創出しようとする運動である。アメリカ革命を先導したラディカル・ウィッグとディセンターたち、とくにトマス・ペイン、ジョゼフ・プリーストリー、ウィリアム・ゴドウィンらの思想がここに含まれる。

これに加えて、メイは「教訓的啓蒙」というべき第四の潮流があったという。これは懐疑と革命とに対立し、「理解可能な宇宙と人間の道徳的能力と進歩とを教える」立場であり、独立後のアメリカで支配的な思想となった。この啓蒙思想はスコットランドの影響を受け、穏健なカルヴィニズムの支配する大学で教えられたものだが、プリンストン大学の前身、カレッジ・オブ・ニュージャージーの学長ジョン・ウィザースプーンにその典型を見出すことができる。スコットランド教会の聖職者ウィザースプーンは、人生の半ばにしてアメリカに渡り、聖職者の育成だけでなく道徳哲学、雄弁論などの講義を通して、市民的徳を教育した。ここでは、新しい共和国「アメリカの国民的良心」、宗教家、政治家、法律家、医師、実業家といった有識市民層のモラル・バックボーンの思想的由来を検討したいのである。

1 スコットランド啓蒙とウィザースプーン

今日ジョン・ウィザースプーンは、プリンストン大学の第六代学長、アメリカ独立期の指導者、聖職者として独立宣言に署名した唯一の人物として知られている。⁽⁴⁾だが、彼が学長として招聘を受けてアメリカに渡ったのは1768年45歳の時であるから、その時すでにスコットランド教会の有力な聖職者として、確固たる地位を獲得していた。彼は1723年にエディンバラ近郊の牧師の家庭で生まれ、地元のグラマースクールからエディンバラ大学に入学し、卒業後も数年間聖職者の訓練を受けたのち、教区牧師として就任している。彼は有力な教会指導者となり、アーヴァイン地区長老会では何度か議長に選任されており、その上位組織であるグラスゴーとエアの地域宗教会議の議長をも経験し、スコットランド教会の教会総会の代議員としても常連であった。⁽⁵⁾

ところで、このウィザースプーンは、スコットランド啓蒙の担い手として注目される「エディンバラの知識人」と同一の世代に属する。スコットランド啓蒙の社会史的研究でリチャード・B・シャーは、1720年前後にエディンバラ近郊で生まれ育った牧師の子弟たちに、新しい思想的潮流の担い手を見出した。ウィリアム・ロバートソン、ヒュー・ブレア、アダム・ファーガソン、ヘンリー・ヒューム、アレグザンダー・カーライルたちは、名誉革命とイングランドとの合併後の安定したスコットランド社会にあって、開明的な教育を受けて聖職者への道を歩む中で、それぞれ歴史学、修辞学、道徳哲学、劇作、時事評論といった分野で傑出した業績を残していった。そのグルー

プの周辺には、ディヴィッド・ヒューム、アダム・スミスもいたのである。⁽⁶⁾

この「エディンバラの知識人」たちは、18世紀の後半にはスコットランドの教会と大学で要職を占めるようになり、教会内部では「穏健派」を結成していった。彼らは長老派の基本信条であるウェストミンスター信仰告白を保持しつつ、厳格な教理よりは道德生活を、「予定と選び」よりは社会的義務の遂行を強調する傾向にあった。彼らはスコットランド教会が開明的となりまた寛容となつて、社会の安定と進歩の支柱となることを目指したのである。彼らはスコットランド教会にあって、聖職者と地域の有力者の同盟を重視し、聖職者の任命に関する庇護者の権利を支持し、また教会総会の権威の確立、秩序の維持にも努めた。聖職に関する庇護者の権利は、都市にあっては都市参事会、農村にあっては貴族、地主の権利を意味したから、教会穏健派の立場は名誉革命後の社会体制の維持であり、「ウィッグ・長老派的保守主義」を意味するものであった。⁽⁷⁾

ジョン・ウィザースプーンは社会的出自においても教育においても、この教会穏健派と共通していた。しかし、注目すべきことに、彼は教会穏健派の批判者、教会民衆派の指導者となつていった。彼は匿名で『教会性格学』を表したが、その内容は穏健派への痛烈な風刺であった。「穏健な人々は、厳格な盟約で結合し仲間となり、最大限お互いに支持しあい擁護しあう点で失敗することはない。」⁽⁸⁾ ウィザースプーンは、このように穏健派の党派性を皮肉るのである。では穏健派は、どのような人々であり、どのような思想的傾向が問題だというのであろうか。

穏健派は第一に、ギリシャ・ローマ的教養に傾斜し異端的だといわれる。「大学の学長であれ、神学教授であれ、さらには神学生であれ、どんな地位にいようと、異端の嫌疑を受ける教会人は、天才、学識ある人物、並外れた価値をもつ人として尊重されるし、少なからず支持され保護される。」⁽⁹⁾ 第二に、彼らには道德的な緩みが見られるという。穏健な人々の間では「だらしない生活とか不道德な傾向と批判される人がいたとしても、批判を招いた過失が……『よい気分の悪徳』であれば、可能な限り保護され、かくまわれる。」⁽¹⁰⁾ 彼らに影響力のあつたシャフツベリーは宗教的な事柄を考えるのにもっともよい時とは、楽しいとき、気分が良いときというが、気分のよいときは「悪徳」に染まりやすいときでもある。彼らの間では、「悪徳」と道德の区別がつきにくいというわけである。

これを別に言えば、穏健派は宗教的な信条を深刻に考えていないということになる。「穏健な人の性格では、信仰告白を冷笑しつつ語ること、自分はそれを完全には信じていないことをほめめかし、正統性という言葉、侮蔑と非難の言葉とすることが必要である。」⁽¹¹⁾ では、教会人でもある彼らは、どのように会衆に説教するのか。ウィザースプーンによれば、穏健派の説教者の特徴は次のようなものである。「(1)〔説教の〕主題は、社会的義務に限定すること。(2)説教者は義務を推奨するときには、合理的な考察から、とくに美と徳の整った均衡、それに将来のより長期の自己利益は考えず、現在の生活における利点を考えること。(3)説教者の権威は、聖書からではなく、聖書にはなるべく依存しないで、異教の著者から引き出すこと。(4)説教者は、庶民にはとても受け入れられ

ないのがよいこと。」また、「牧師は態度と行動において、洗練さを高めなければならず、出来る限り上品なジェントルマンの雰囲気とマナーとを身につけなければならない。」⁽¹²⁾ たしかに穩健派の牧師たちは、そうした地方社会の有力者の庇護を受けて、有力な教会の聖職に任命されたのである。

これと対照的な立場は、説教の主題としては、社会的義務よりも「聖霊の恩恵」を取り上げ、合理的な判断よりも「感情の喚起」を目指し、典拠としてはあくまでも聖書であった。彼らは民衆とともに歩むことを重視し、牧師の態度としても、単純な信仰的な行為である「献身的態度」と「礼拝」とを積極的に示したのである。この立場をウィザースプーンは正統派と呼んでいるが、以上のような意味で民衆派と呼ぶことも出来た。教会民衆派は、聖職者の任命については、教会の庇護者ジェントルマンの意向ではなく、教会員自身、教会の会衆の判断を尊重することを求め、穩健派と対立したのであった。⁽¹³⁾

ともあれ、ウィザースプーンは教会穩健派の強力な批判者、民衆派の指導的牧師として名声を獲得し、彼の説教は印刷されて広く読まれるようになった。また、織物工業地帯として成長しつつあったペイズリー教区の牧師として招聘を受けたし、1764年にはセント・アンドリュース大学から名誉神学博士の学位を受けている。彼はロッテルダムやダブリンの有力な教会から招聘も受けていたが、さらに今度はアメリカ植民地の長老派の大学、カレッジ・オブ・ニュージャージーの学長へと招聘されることとなった。当初彼はこれも固辞したし、とくに妻は、前任学長の多くが在任中に死亡するという過酷な職務を理由に大反対であったといわれる。最終的な説得の局面では、当時エディンバラ大学の医学生であったフィラデルフィアの科学者で独立期の指導者、ベンジャミン・ラッシュの力が大きかったともいわれるが、ウィザースプーンはついに承諾し、1768年にアメリカに渡ることとなった。⁽¹⁴⁾

北米の中部植民地はスコットランド系移民が多かったところであり、したがって長老派の影響も大きい地域であった。ニュージャージー大学は長老派の指導者たちにより1746年に設立されたが、その当時のアメリカ長老派教会には、二つの陣営があった。オールドライトとニューライトとも呼ばれるが、とりわけジョナサン・エドワーズらのリヴァイヴアル運動の評価をめぐる、保守的な勢力と福音主義的勢力に分断されていたのである。前者は、教会の秩序と権威を重んじ健全な教理を維持したが、後者は、回心の経験を重視し信仰生活の感情的側面を評価し、また信徒の発言力を尊重した。この対立は、一面でスコットランドの穩健派と民衆派の対立と似ているが、ウィザースプーンはアメリカでは二つの立場を調停するものとして歓迎された。彼はスコットランドでは一部民衆派の分離とは行動を共にしなかったし、民衆の敬虔を評価しつつ神学的にも堅固な立場を築いていたからである。⁽¹⁵⁾

2 大学の改革者として

近年、植民地期のアメリカとスコットランドとの密接な関係がさまざまな側面から議論されているが、その重要な側面が大学教育である。⁽¹⁶⁾ 大学を基盤としたスコットランド啓蒙のアメリカの大学への影響が注目されるのである。たとえば、植民地の第二番目の大学、ウィリアム・アンド・メアリー⁽¹⁷⁾の学長は、スコットランド人ジェームズ・ブレアであり、ペンシルベニア大学の前身フィラデルフィア・カレッジ学長に就任したウィリアム・スミスも、アバディーン⁽¹⁷⁾の出身であった。常識哲学のトマス・リードのいたアバディーンでは目覚ましい改革が行われたが、一人の学監が学生の個人的チューターとして複数科目を教える方式に代わって、専門分野ごとに教授職が設定され、カリキュラムにおいてもスコラ的な論理学、形而上学に代って幅広い近代的な学科目がおかれた。すなわち、「自然史、地理学、市民社会史、数学、自然哲学、修辞学・文学」、それに「倫理学、政治学、経済学および自然神学をふくむ近代の道德哲学」が学ばれたのである。⁽¹⁷⁾

プリンストンのジョン・ウィザースプーンも、スコットランドの大学改革をアメリカにもたらしたもう一つの事例なのである。ウィザースプーンが最初に手がけたことは、教材の充実であり、渡米にあたってスコットランド啓蒙を代表する、ハチスン、ヒューム、スミスなどの著作を三百冊ほど持ち込んでいる。また、自然科学教育の充実のためにリッテンハウスの有名な太陽系儀や、地理学のために地球儀を購入したし、実験器具を扱う研究助手も配置している。また、彼は大学付属のグラマースクールの改革にも手を染め、グラスゴー方式のラテン語の教育をすすめ、また古典語に加えて現代語すなわち英語教育の重視を宣言している。入学者の資格要件も厳格化し、進級に当たっても厳格に審査し、卒業生の教育水準の維持にも努めた。⁽¹⁸⁾

ウィザースプーンの提示したカリキュラムは、スコットランドの大学改革にそったものであった。「一年次には、ラテン語、ギリシャ語を読解し、それとともにローマとギリシャの古代の文物に触れ、修辞学を学ぶ。二年次には、語学の勉強を継続し、地球儀を用いて、地理学体系を完全に学ぶ、それとともに哲学の第一原理、数学的知識の初歩を学ぶ。第三年次には、語学の勉強を完全に止めるわけではないが、主に数学と自然哲学に従事する。四年次には、高度な古典を読み、数学と自然哲学を続け、道德哲学の課程に進む。これらに加えて、学長は三年生と四年生に講義を行う。最初は、年代学と歴史学について、その後は作文と批評について行う。」⁽¹⁹⁾ このカリキュラムの実施にあたって、学長みずから多くの学科目を教えなければならなかったし、また教授陣の充実にも努めたのであった。

小さな大学の新学長として、ウィザースプーンは学生の募集と寄付の獲得にも力を注がなければならなかった。彼が、西インド諸島の有識者に向けて、子弟をイギリスの大学ではなくプリンストンに送るように説得する文章が残されているが、プリンストンは地理的条件、気候的条件だけでな

く、教育を充実させていると述べている。プリンストンでは若者に学問をきちんと教えるだけでなく、道徳的態度を身につけさせることができる。イギリスの大学は各学年に130人もいるから、一人一人に目が行き届かない。たしかにイギリスには偉大な教師はいるが、彼らは決して怠惰な学生に目を光らせるのに熱心なわけではない。プリンストンでは「四半期ごとの試験」を課しているし、「プリンストンの学者は、着任すると大学で居住」し、つとめて研究室にいることにしているというわけである。⁽²⁰⁾

注目すべきことに、この時点でプリンストンは長老派牧師養成の神学校という色彩を明確に脱している。ウィザースプーンは大学の使命を「あたらしい国における必要、とくに学問が影響を及ぼして、産業や企業に適切な方向付けと十分な力を与える」教育によって「技芸と産業に加えて、美徳と幸福を推進する」ことと述べている。⁽²¹⁾ また、プリンストンが教派に依存しない独立した教育機関であり、教員を採用するにも、「牧師からの推薦とか、有力な家庭からの圧力を受けない」で、「人物を公的に評価」しており、「自由の精神が息づいている」という。その結果、幅広い地域の人々、さまざまな立場の人々から評価を受けていた。聖職者教育としては、長老派に限らずさまざまな教派の神学生がここに来たし、また法律家や医者といった専門職を志向する人々もここで学んでいるといわれる。⁽²²⁾

プリンストンはいわば幅広い専門的職業人、有識市民のための教育機関であるというのだが、その一つの現われが英語教育の強調、とくに口頭表現の重視にあった。ウィザースプーン自身が雄弁論についての講義を行っていたが、大学では学生が集まって演説やディベートを競う機会が多く与えられた。その目的は、社会の有力者となる学生たちが、公職に就く場合に言論によって指導性を発揮できるように配慮されたのである。実際、ウィザースプーンの就任から四半世紀の間であって、プリンストンの卒業生のなかでは、牧師になったものが四分の一弱で、残りは法律家や実業家など世俗的な職業に向かった。とりわけ、プリンストンは「大陸会議の議員6人、合衆国の大統領1人、それに20人の上院議員と23人の下院議員」を輩出し、高潔な人格をもつ公職者の教育機関として知られるようになった。⁽²³⁾

3 『道徳哲学講義』その1、理性と敬虔のあいだ

このように、スコットランドでは啓蒙の担い手、教会穏健派を批判したウィザースプーンは、アメリカではプリンストンの学長として、スコットランドの大学をモデルとした大学改革に従事した。すなわち、一面でスコットランド啓蒙に対する宗教的保守主義からの批判者と見なされていた彼は、他面ではスコットランド啓蒙のアメリカへの伝播者の役割を演じたのである。この二つの側面、前期ウィザースプーンと後期ウィザースプーンは、どのように矛盾無く説明できるのであろうか。

まず言える事は、ウィザースプーン自身が啓蒙思想の担い手たちと、世代的、教育的経験を共に

している事実である。彼はカーライルとエディンバラ大学で同級であり、エディンバラ大学でカスタレス学長以来の開明的な大学教育を彼自身享受していた。したがって、先に見た大学改革は、彼自身が受けた大学教育のアメリカへの導入であり、数学や自然科学の重視、進歩と改善への関心をウィザースプーンも若いころより共有していたのである。彼の宗教的な正統的立場は、それと矛盾するとは考えられていない。先に見た『教会性格学』では、教会穏健派が異端的な傾斜をもつことを指摘し、聖書の権威を貶めていると批判していたが、それは意識的に作られた穏健派の戯画化、極端な画像であった。彼が風刺文として穏健派を批評していること自体が、彼の人文的教養の受容を意味しているともいえるのである。⁽²⁴⁾

では、より積極的にウィザースプーンは、信仰と理性の関係をどのように捉えていたのであろうか。そこで手がかりとなるのは彼が学長として担当した『道徳哲学講義』である。道徳哲学は「スコットランド啓蒙の父」フランシス・ハチスン以来、重要な学問分野であり、一群の傑出した道徳哲学者が輩出していた。グラスゴー大学でのハチスンの後継者がアダム・スミスであり、スミスもハチスンの道徳哲学を独自に展開して、彼自身の学問体系を作り上げていった。では、ウィザースプーンは宗教的正統派を自認しつつ、どのような立場から、道徳哲学に取り組んだのであろうか。講義の冒頭でウィザースプーンは、道徳哲学を「義務あるいは道徳の原則と規則を取り扱う学問の一部門である」と定義し、「道徳的義務の本質と根拠を、啓示とは区別して、理性によって探求することから、哲学と呼ばれる」とも記している。⁽²⁵⁾

では、宗教すなわち聖書の啓示ではなく、哲学すなわち理性による探求には、どのような意味があるのであろうか。学長であり牧師でもあるウィザースプーンは、次のような根本的な疑問に答えなければならなかった。「道徳哲学を宗教から分離することは、合法的か、また安全といえるか、有益であるのか。」「道徳哲学は啓示される真理と同一であるのか、あるいは異なっているのか。」と。この問いの背景には、道徳哲学に不信をいだく宗教家たちがいたのである。彼らは道徳哲学に対し「もしも同一であるなら、不必要であり、異なっているなら、誤りで危険である。」と警戒の念を持っていた。事実、ウィザースプーンは「あるニューイングランドの著者〔ジョナサン・エドワーズを指す - 引用者〕は、道徳哲学は不信を学説へと圧縮した物だといっている。」と注意を促していた。⁽²⁶⁾

これに対するウィザースプーンの立場はこうである。「この反対論はもっともらしいとしても、根底においては確かなものではない。もしも、聖書が真実であるのなら、理性による発見は、それとは対立するはずが無い。」「霊的な著作が、理性や観察によって、展開されたり確認されたりすることがあり、このことによって、霊的著作に美しさと力が加えられる。」⁽²⁷⁾ すなわち、聖書の真理は、哲学によって補われたり確認されることにより、さらに輝きを増すというのである。啓示の光と理性の光は対立するものではなく、相補い合うものと考えられている。

「自然哲学の高貴で顕著な改善は、宗教上の関心を傷つけることにはまったくなっていない。逆に、宗教上の関心を非常に推進している。それと同じことが、人間本性に関する知識である道徳哲

学と言えない理由はないのである。」「私の意見はこうである。聖書は全体として、完全に健全な哲学と一致しているが、聖書はすべてのことを教えるために記されているのではない。」⁽²⁸⁾ このように、ウィザースプーンは、確信を持って、理性的な探求が神の摂理を明らかにし、また聖書の真理を証し、また飾るものだと語るのである。

ウィザースプーンの道徳哲学講義は、当時の学者の多くとともにハチスンの道徳哲学講義を踏襲している。道徳哲学は二つの部門すなわち「倫理学と政治学」を持ち、後者には法学が含まれ、「倫理学は個人的な義務にかかわり、政治学は、政治体制、政府（統治）、諸社会の権利にかかわり、法学は立憲国家における正義の執行にかかわる。」⁽²⁹⁾ ウィザースプーンの全十六回の講義のうち、倫理学として、人間論、義務論、美德論などが取り上げられ、政治学として、自然的自由と権利、所有論、家族論、政府論、統治形態論、自然法と国際法が取り上げられ、最後に法学が議論されていた。これはハチスンの著作『道徳哲学体系』の主題の順序とほぼ対応する。では、そうした問題を取り上げる中で、理性の探求と聖書の真理は具体的にどのように調和すると見られているのであろうか。

ところで、この道徳哲学の先達ハチスンについて、ウィザースプーンは先にみた『教会性格学』で、伏字を用いながら痛烈に皮肉を述べていた。彼は、穏健派が重視する基本的なテキストとして、ライプニッツの神義論やシャフツペリの性格学などとならんでハチスン氏 (Mr.H__n's) の作品が用いられていると指摘している。また現在の世代は、ハチスン氏 (Mr.H__n's) の哲学で教育されたが、その教理は「徳とは本能の感情の上に基礎づけられており……博愛がその源泉である」というものであると述べている。⁽³⁰⁾ とすれば、聖書ではなく人文学者の著作に依拠し、神への敬虔ではなく社会的義務のみを教えるという教会穏健派への皮肉は、ハチスンにも妥当するというべきではないだろうか。そのハチスンをウィザースプーンはどうして受け継ぐことができたのか。

ウィザースプーンの基本的立場は、人間本性の探求は創造主の意図を知ることには他ならないというものであった。「義務や責務の諸原理は、人間の本姓から引き出されなければならないという点で、一致が見られる。すなわち、創造主が人間をどのように形づくったのか、どんな意図でそうしたのかを発見することができる」とすれば、人間はどうでなければならないかが知られるのである。⁽³¹⁾ したがって、ハチスンの言う道徳感覚について、ウィザースプーンは次のように展開することができた。「この道徳感覚は、聖書や普通の言語でわれわれが良心と呼ぶものと、正確に同一のものである。」「それは、われわれの創造主がわれわれの心に記した律法であり、理性的な推論に先行して、義務を示唆し実行することを求める。」⁽³²⁾ と。

ウィザースプーンの講義の特徴は、一面で人間本性、すなわち創造の秩序から道徳的判断を導く方法を承認しつつ、他面で絶えず人間と神との関係を想起している点にあった。たとえば、「義務の本質」に関して、「道徳的卓越の感覚、道徳感覚が指示する事柄を行う事から生じる快樂」から説明する立場について、こういわれる。「道徳感覚はそのうちに、ある種の行為を、美しく、賞賛に

値し心地よいと是認する以上のものをもたらすのである。」「道德感覚は、義務の感覚をも示唆し、これこれの事柄は正しく、他はあやまりで、われわれは前者を行う義務があることを示唆する。道德感覚すなわち良心には、われわれがどのように行為するかに応じて、〔来るべき世において - 引用者〕褒賞と処罰が帰結するとの理解や信仰がともなっている。」³³

注目すべきことに、ここでウィザースプーンは、道德哲学者が外的感覚と類比して捉える道德感覚を、人間の行為をすべて知り、行為に応じて裁きを行う神への義務の感覚に対応しているという。「心地よいから義務なのではなく、義務であるから心地よいのである。同じことが美と是認についても言える。私が素朴で正直で、勤勉で敬虔な人間の行為を是認するのは、怠惰で放蕩な人間のそれよりも美しいからではない。その人が義務の範囲内に生活しているが故に、その行為は美しく好ましいと写るのである。私が道徳的行為により高度な美を見るのは、義務の感覚からその美が生ずるからである。」³⁴

ウィザースプーンはまた、美德の基礎にあるものとして、「神の意志」「事柄の根拠と本質」「公共的利益」「個人的利益」といった基準で説明する学説について、「これらすべてにある真実が含まれている」と述べている。ウィザースプーンは、一般的な利益に導くから徳であるという立場も、個人の深い満足にかかわるから徳であるという立場も一概に否定することはない。彼はあくまでも道德哲学的方法によって明らかになる事柄を、宗教的な敬虔と調和するものと捉えることができた。それが故に、道德哲学は宗教的敬虔と矛盾しないのである。この『道德哲学講義』では、『教会性格学』における評価とは異なり、ハチスンも、サミュエル・クラークやジョナサン・エドワーズといった神学者と同じく、宗教的な「敬虔をその学説に組み入れている」として評価されているのである。³⁵

4 ウィザースプーンの『道德哲学講義』その2、抵抗権をめぐって

近年スコットランド啓蒙はアメリカの独立の思想的背景として注目されているが、その焦点の一つがハチスンの道德哲学の影響である。ハチスンはいわゆるスコッチ・アイリッシュで、長老派の牧師の子弟であり、アイルランドの非国教徒専門学校を経てグラスゴー大学に学び、卒業後はやはりダブリンの非国教徒専門学校で教えた後、母校に迎えられた。彼の道德哲学の著作は、講義ノートが基礎にあったと考えられるが、『道德哲学への短い序説』と『道德哲学体系』として出版された。キャロライン・ロビンズは、ハチスンとコモンウェルスマンのアメリカへの影響に関する先駆的な研究の中で、『道德哲学体系』に次のような「抵抗権論」が見られることを指摘していた。³⁶

「政治的権力はすべて、明白に公共的利益（公共善）のためにのみ、授与され受容されているのであるから、支配者の側で背信行為、権力をその反対の目的に用いる場合は、服従する側は、その義務から解放される。したがって、臣民は不当行為から自分自身を防衛する自然権を持つのである。

……正当な理由で奴隷状態におかれた奴隷でさえも、残虐で野蛮な主人に激しく抵抗する権利をもつのである。」

「あらゆる政治体制で、政治権力は公共的利益のための信託と考えられているので、政治権力が背信行為によって、それを喪失するほど濫用されてはいないか、という問題が生じる。」「人民あるいは人民が信頼し、人民によって選ばれた賢明な代理人による評議会は、その問題を決着する権利をもっと主張することができる。」³⁷⁾

では、このハチスンの見解をウィザースプーンはどのように受け継いだのであろうか。ウィザースプーンもまた『道徳哲学講義』で政治を論じ、さまざまな統治形態を論じた後に、次のように抵抗権に言及していた。

「社会契約では、われわれはその〔主権の〕決定に従い合意することが前提とされている。しかしながら例外がある。もしも、至高の権力が、それがどこにあるものであれ、明らかに専制的に行使されるのであれば、臣民は、その権力に抵抗し、打倒することができる。しかし、それは圧制に従うよりも、政府を揺るがすことが、明白により有益であるときに限られる。しかしながら、主権へのこの抵抗は社会全体を転覆させることであるから、政府が無政府状態のように腐敗し、不確かな新しい政府の方が、以前と同じ状態の継続よりも好ましいことになるまでは、試みられてはならない。」「政府に抵抗できる場合、誰が判断するかと尋ねられるのであれば、私は臣民一般であり、すべてのものが彼自身で判断できると答える。このことは、臣民を裁判官でありかつ当事者とするようになるが、他に救済策は無い。そのことで、圧制的な支配者が裁判官となる特権を否定するのである。」「明らかにこの意味は、支配者の小さな間違いが抵抗を正当化するものではない。われわれは腐敗が法外なものとならないかぎり、いつも彼等に従順になり服従しなければならない。われわれが良くないと判断したらいつでも、合法的な権力に抵抗できるのであれば、社会状態とは矛盾するし、服従の最初の考え方とも矛盾する。」³⁸⁾

ハチスンは、政治権力とは公共的利益を目的とし、人民の信託によって与えられているから、政府の側に背信行為があれば、人民の側は抵抗権を持つこと、その判断は人民の議会が行うと語っている。見られるように、ウィザースプーンもまたその見解を継承している。ただし、ハチスンの場合には、抵抗の主体は人民の議会であったが、ウィザースプーンの場合には臣民一般としか述べられていない。これは植民地の人民が議会に代表を送ることができない状況を反映している。したがって、その状況で抵抗権の行使が適切かどうかの判断には、より慎重な考慮が求められ、注意深い留保が付けられている。いずれにせよ、この抵抗権をめぐる議論では母国に対する植民地の権利に言及してはいないが、ここから独立の権利もまた論理的に導き出すことができた。事実ハチスンは次のように、母国の横暴に対する植民地の独立の権利をも明言していた。

「政治的な結合の目的は、結合している人々の一般的な利益にあるから、その利益は人類のより広い利益に従属しなければならない。本国の意図が力によって変えられ、安全で穏健で穏和な限定的

な権力から、徐々に厳格で絶対的な権力へと墮落するのであれば、あるいは、同じ政体の意図の下で抑圧的な法律が、植民地や属州に関して作られ、植民地が人口と国力を増やし政治的な結合の良き目的を達成するのに自分たちだけで十分となるのであれば、服従の状態に留まらなければならないわけでない。」⁽³⁹⁾

ロビンズはこのハチスンの文章が植民地の大学で広く学ばれたことに注目するのだが、ウィザースプーンは、アメリカで抵抗を選ぶべきか服従を選ぶべきかの論争があったことを振り返りつつこう述べていた。「われわれの国では、かつて受動的な服従と無抵抗をめぐって、有名な論争があったが、いまでは過去の物となった。服従を支持するものがよく言ったのは、どんな事例でも政府に抵抗することが合法的だと教え、反乱を是認とすることは、あらゆる秩序を破壊し、国家を永続的な反乱状態に置くことになるというものであった。」これに対して、私は次のように答える。「この〔抵抗権という〕すべての者の固有の権利を拒絶することは、不正義と圧制を確立することであり、すべての善良な臣民を、他者の野心と強欲の餌食として放置することである。……抵抗が有効になるのは全人民が立ち上がってはじめてそうなるのであり、全人民が統治者に向かって立ち上がるのは、現実に大きな挑発がなければ考えにくいのである。」⁽⁴⁰⁾

ハチスンが植民地の独立について講義で触れたのはアメリカの独立の四半世紀以上前であり、独立問題は未だアクチュアルな政治的課題ではなく、いわば仮定の問題、論理的可能性の問題であった。ところがウィザースプーンは、現実に独立運動に直面したのである。アメリカでのウィザースプーンは、大学の学長と長老教会の指導者という当初期待された役割を超えて、政治的指導者としての役割を担うことになった。1774年彼は、本国との関係が危機状況になる中でサマセット郡の通信委員会の創設メンバーとなり、その後ニュージャージー邦議会の議員に選出され政治の表舞台でも活躍することとなった。邦議会では知事ウィリアム・フランクリンを追放する上で指導的役割を果たし、またニュージャージーを代表して、大陸会議の議員となり独立宣言に署名した。独立後も政府の役割を果たした大陸会議の議員として六年もの間とどまり、とくに戦争、財務および外交委員会でも活躍したのであった。⁽⁴¹⁾

5 「アメリカの自由」と繁栄と宗教

ところでウィザースプーンは、時局的な発言のなかでアメリカの独立の権利を「アメリカの自由」とも語っているが、その「アメリカの自由」を担うものは大陸会議に他ならなかった。「大陸会議は、適切に言うなら、北アメリカの人民の偉大な一団の代表」であり、その会議の目的は、「諸植民地を連合させ、一つの政体をつくり、自己防衛に努め、英国の人民に、われわれは自分たちから服従することは無いことを確信させ、彼らが明らかな暴力で強制することは、不可能でもあり不適切でもあることを自覚させること」だというのである。イギリス政府は大陸会議について、「無秩序な

立憲体制に反する会合であり、その会合自身を犯罪的であると考えている。⁽⁴²⁾ これに対して圧制に抵抗するアメリカ人民の権利を宣言しなければならないというのである。

ウィザースプーンは大陸会議が次のような決議を採択することを提案している。「1. 邦や地域の指導者が語っているように、われわれは不当な課税を強制されないかぎり、王室には忠誠を尽くし、英国から離脱しようとは思わないことを宣言すること。……2. われわれは英国議会の主張は、不法であり反立憲的であると考えているだけではなく、われわれは確固として決して議会に屈従しないことを心に誓っており、熟慮の上、わが身とわが財産とが奴隷的に隷属させられるよりは、恐れつつ、また絶滅も覚悟しつつ、戦争を選ぶことを宣言すること。われわれは全体の利益に固執し、どの植民地も個別の和平を求めず、……連合を維持し、アメリカの自由が堅固な基礎の上に築かれるまでは、とくに、いま苦しんでいるマサチューセッツ湾植民地が、現在不当に剥奪されている権利を回復するまでは、同一の施策を追求することを宣言すること。」⁽⁴³⁾

ところで、このように「アメリカの自由」は本国の専制への抵抗の権利であり、来るべきアメリカ政府の基礎となるものであったが、他面、ウィザースプーンがそれをアメリカの顕著な経済的繁栄と結びつけていることは注目に値する。ウィザースプーンは、アメリカ植民地の現状について、「人類の歴史」に例を見ない発展を遂げていると見ていた。「アメリカのヨーロッパ定住地一般、とくにイギリス定住地は、多くの点で、かつて例を見ないような光景を世界に提示してきた。」かつての移民や植民地は、人口も少なく領土も狭く、改善や進歩の足取りも覚束なかった。しかしアメリカは異なる。「その国は、境界はなく、新しく手付かずであり、権力と学識と富の点で、ヨーロッパと同等のものを同時にもっている。アメリカの耕作と人口は、奇跡といえるほど急速に前進している。……北アメリカのイギリス植民地はこの点で、地上のどの国よりも上回っている。」⁽⁴⁴⁾ その原因はといえば、「アメリカの自由」に他ならない。

この点でウィザースプーンはモンテスキューを引き合いに出しつつ次のように語っている。「モンテスキューは、人口の増減の自然的原因は、道徳的な原因の半分も影響しない。彼の言う道徳的原因とは、社会状態、政治状態、および人民の行動様式である。戦争、飢餓、疫病は、自由と平等と法があるところには、ほとんど見られない。」「自由の力の効力を示す完全な事例として、わが邦を訪れるだけで十分である。南部植民地は、豊かな地味と輝く太陽に恵まれているが、人口と国力と土地の価値の点で、ペンシルベニアやニューイングランドよりも、ずっと劣っている。これは簡単に説明できる。この二つの植民地の立憲体制が、普遍的な勤勉に対してずっと好都合なのである。」⁽⁴⁵⁾ 「アメリカの自由」、とくにペンシルベニアとニューイングランドのそれは、人々の勤労を引き出し促進することで、急速を繁栄を導いているというわけである。

「個々の植民地の相違にもかかわらず、アメリカは一般に、改善の足取りにおいて、近年驚嘆すべき光景を提示している。……その国は、年々その美と豊かさを増すに加え、人々も数を増し、富と技芸と学問において成長し、注意深く啓蒙され、絶えず前進し、また自由と平等な法によって所有

の安全を保持している。自由と法が、すべてのものの真実で適切な源泉なのである。」これに対して、英帝国が「植民地との貿易から、多大の増加しつつある利益を、刈り取っている」ことが問題なのである。⁽⁴⁶⁾したがって、アメリカの独立問題は、経済的にいえば、イギリス本国が不当な課税によって「アメリカの自由」を侵害し、アメリカの富を収奪することであり、またアメリカの繁栄の基礎を掘り崩すことを意味したのである。

さらに注目すべきことに、ウィザースプーンにとって「アメリカの自由」とアメリカの経済的繁栄はまた、アメリカの宗教の問題でもあった。アメリカ独立の際の有名な説教「人間の感情への摂理の支配」で、独立が単に政治的な権利問題にとどまらず、宗教的問題であることを次のように語っていた。「私は、あなたがたに宗教の公共的利益に注意を向けること、別の表現でいえば、神の栄光と他者の益のための情熱に留意することを勧めたい。……一般的な不品行と墮落が人々を破壊に至らせることは、明白なのです。……国民の行動様式が純粋で、真実の宗教と内面的態度が生き生きとしておれば、最強の敵が彼らを打ち負かそうと試みても、困惑し目的を達することはできません。」「真実で汚れない宗教を推進する点でもっとも誠実で活動的な人、神の冒涇と不道徳を抑圧するのにもっとも熱心な人こそが、アメリカの自由の最良の友なのです。」⁽⁴⁷⁾

このように宗教的倫理的態度は、国を支え、自由を確保させるだけでなく、アメリカの繁栄の基礎でもあることが述べられている。「私は、戦場に召集されていないものすべてに、産業の業に最大限勤勉に従事することを勧めます。それは、必需品を供給するだけでなく、国力を増加させるのです。社会に行き渡っている勤労の習慣は、直接の結果として富を増加させるだけでなく、多くの悪徳の導入を妨げ、慎みとよい道徳と密接に関係します。怠惰は、あらゆる悪徳の母であり養母です。……それゆえ、勤勉はもっとも重要な道徳的義務であり、国民的繁栄にとって絶対に必要であり、かつ神の祝福を得る確実な方法です。」「最後に、……質素を勧めたい。こうしたことは、われわれの間では絶対に必要で、徳を持つ勤労と公共精神とにもっとも密接に関係しています。食事の節制、服装や家具そのほかの簡素さと品位は、一般的に言って、独自の愛国者の特徴なのです。」⁽⁴⁸⁾

見られるようにウィザースプーンはアメリカの自由と繁栄が、宗教が教える勤勉と質素と公共精神に対応することを語っている。このことは独立運動への参与と「真実の宗教」が不可分のものとして考えられていることでもあった。「あなたがたが、現在の公的脅威を賢明に改善すること、また、あなたがたの神への義務と国への義務、家族への義務とあなたがた自身への義務が、同一であることを覚えておくように私は切に求める。真実の宗教とは、……内面的な精神状態と外面的な行為に他ならないのです。困難と試練の時には、敬虔と内面的態度をもつ人のなかに、腐敗のない愛国者、有益な市民、不屈の兵士を見出すことが期待できるのです。」

したがって、「アメリカの自由」を主張した聖職者ウィザースプーンの立場は、次のような祈りとして表現されるものであった。「アメリカで真実の宗教と市民的自由が分離されることなく、その一方を破壊しようとする不正な試みが、結果としてその両者を支持し確立することになりますよ

うに。このことを神が叶えてくださいますように。」⁽⁴⁹⁾

お わ り に

以上、「アメリカ啓蒙と宗教」問題の一事例として、ジョン・ウィザースプーン思想を取り上げてみた。スコットランド教会の民衆派指導者ウィザースプーンは、プリンストンの学長となり、スコットランド啓蒙を継承しながら大学改革に着手した。スコットランドでは、教会穏健派が担った啓蒙思想の聖書の軽視、宗教的関心の低下に警鐘を鳴らしていたのだが、アメリカでは宗教的敬虔と矛盾しないものとして、フランシス・ハチソンの道徳哲学を積極的に受け入れ、市民的徳の教育に力を入れたのである。そこでは、「道徳感覚」と聖書的な「良心」の一致が説かれ、また、圧制に対する人民の抵抗権と横暴な母国に対する植民地の独立の権利も明言されていた。また、「真実の宗教」こそが「アメリカの自由」と「繁栄」を支えるものと主張されていたのである。こうした啓蒙と宗教の一致こそが「教訓的啓蒙」の立場であり、独立後のアメリカの大学で教えられアメリカ社会に広く受け入れられていったのである。⁽⁵⁰⁾

アメリカの独立期にあってプリンストンは、聖職者とともに法律家、政治家、実業家、医師といった有力な指導的人物を輩出することになるが、ウィザースプーンは宗教的指導者と世俗的指導者とに共通する、いわばアメリカの市民的徳、「国民的良心」の涵養に努めたのである。ジェームズ・マディソンがウィザースプーン学長の下で卒業生であることは有名であるが、プリンストンに限らず、革命期の政治指導者の多くがスコットランド啓蒙、その道徳哲学の影響を受けていたことも知られている。ヴァージニアの農園主の子弟、トーマス・ジェファーソンも、少年期にグラスゴーとエディンバラで学んだウィリアム・ダグラスに四年間教育を受け、進学したウィリアム・アンド・メアリーでは、アバディーンで学んだウィリアム・スモールの影響を受けたのであった。⁽⁵¹⁾

19世紀半ば、アメリカを訪問したある観察者は、アメリカ社会には、ヨーロッパ社会を支えている国王も貴族も特権階級も国教会も常備軍も無く、伝統的な外的制度は欠けているが、そこには内的な精神的資質があることを指摘していた。すなわち、「権利と法への普遍的な敬意、キリスト教の深い尊重、保守的な精神」「独立心」が見られるというのである。⁽⁵²⁾これを「アメリカの国民的良心」と呼ぶことが出来るとすれば、これこそが大学の道徳哲学の授業で教えられた「教訓的啓蒙」の所産であった。⁽⁵³⁾19世紀アメリカの道徳哲学の著名な教科書の一つが、ブラウン大学の学長フランシス・ウェイランドの『道徳科学の基礎』である。福沢諭吉が読み『学問のすすめ』で参照したのがこの書物であり、したがってウィザースプーンと「教訓啓蒙」は、日本の近代思想の一流源ともなったのである。⁽⁵⁴⁾

注

- (1) Roy Porter and Mikulas Teich eds., *The Enlightenment in National Context*, Cambridge University Press, 1981.
- (2) Henry May, *The Enlightenment in America*, Oxford University Press, 1976; Henry Steele Commager, *The Empire of Reason*, Anchor Press, 1977; Robert A. Ferguson, *The American Enlightenment 1750-1820*, Harvard University Press, 1997. メイが啓蒙と宗教との関係に注目したのに対し、コマジャーはアメリカをヨーロッパ啓蒙の実行の地として描き、ファーガソンは、アメリカ啓蒙を政治的な自己決定権の思想的背景として捉えている。
- (3) May, *Op. cit.*, p.x i.
- (4) Witherspoon のテキストとしては、近年編集されたトーマス・ミラーによる著作集を参照することができる。ここには、「道徳哲学講義」「雄弁論講義」を始め、重要な著作が収められている。本稿での引用も、ここに収録されているものはここから行う。Thomas Miller ed., *The Selected Writings of John Witherspoon*, Southern Illinois University Press, 1990. 伝記的研究としては、Varnum L. Collins, *President Witherspoon*, 2vols., Princeton University Press, 1925; L. Gordon Tait, *The Piety of John Witherspoon: Pew, Pulpit, and Public Forum*, Geneva Press, 2001. 邦文では、古屋安雄『大学の神学』ヨルダン社、1993年、梅津順一「教会・大学・経済学 - アダム・スミスとその周辺」今関恒夫他『教会』ミネルヴァ書房、2000年。
- (5) Tait, *Op. cit.*, p.7.
- (6) Richard B Sher, *Church and University in the Scottish Enlightenment: The Moderate Literati of Edinburgh*, Edinburgh University Press, 1985, pp.24-31.
- (7) Sher, *Op. cit.*, pp.35, 36. Tait, *Op. cit.*, p.7-10.
- (8) *Ecclesiastical Characteristics: or, The Arcane of Church Policy* (1953) in Thomas Miller ed., *Op. cit.*, p.98.
- (9) *Ibid.*, p.65.
- (10) *Ibid.*, p.67.
- (11) *Ibid.*, p.69.
- (12) *Ibid.*, p.71.
- (13) ウィザーズプーンの穏健派批判のもう一つの論点は、聖職者ジョン・ヒュームの劇作『ダグラス』の上演をめぐるものであった。ウィザーズプーンはそれを宗教的敬虔に反すると批判した。Witherspoon, *A Serious Inquiry into the Nature and Effects of Stage Glasgow*, 1757. この対立は穏健派の勝利に終わった。Sher, *Op. cit.*, pp.74-86.
- (14) Collins, Vol.1, *Op. cit.*, pp.81-86. Tait, *Op. cit.*, p.13.
- (15) Collins, Vol.1, *Op. cit.*, pp.102-104. Tait, *Op. cit.*, p.13. ウィザーズプーンがアメリカへの渡航を決意した社会的背景として、教会民衆派の社会基盤が、アメリカとの経済的関係の拡大を背景として台頭しつつあった貿易業者、織物業者にあり、彼らは積極的な移民の推進者であったことも指摘されている。民衆派にとって中部植民地は、重要なフロンティアでもあったのである。Ned C. Landsman, "Witherspoon and the Problem of Provincial Identity in Scottish Evangelical Culture," in Richard B. Sher and Jeffrey R. Smitten eds., *Scotland and America in the Age of the Enlightenment*, Edinburgh University Press, 1990 p.34.
- (16) スコットランドとアメリカの関係一般について、Andrew Hook, *Scotland and America: A Study of Cultural Relations 1756-1835*, Blackie, 1975; William Brock, *Scotus Amricanus: A Survey of the Sources for Links between Scotland and America in the Eighteenth Century*, Edinburgh University Press, 1982; Richard B. Sher and Jeffrey R. Smitten eds., *Scotland and America*. また、スコットランド啓蒙のアメリカへの影響について、Samuel Fleischacker, "The Impact on American founding" in Alexander Broadie, ed., *The Cambridge Companion to The Scottish Enlightenment*, Cambridge University Press, 2003. スコットランド啓蒙とアメリカの大学について、Douglas Sloan, *The Scottish*

Enlightenment and the American College Ideal, Teachers College Press, 1971.

- (17) Sloan, *Op. cit.*, pp.23-25.
- (18) *Ibid.*, pp.111-114.: Francis L. Broderick, "Pulpit, Physics, and Politics: The Curriculum of the College of New Jersey, 1746-1794," *William and Mary Quarterly* 3rd. Ser., IV, 1949, pp.60-62.
- (19) Witherspoon, "Address to the Inhabitants of Jamaica, and Other West India Islands, in Behalf of the College of New Jersey," in Miller ed., *Op. cit.*, p.109.
- (20) *Ibid.*, pp.105-107.
- (21) *Ibid.*, p.103.
- (22) *Ibid.*, pp.111-113.
- (23) Broderick, *Op. cit.*, pp.67, 68.
- (24) Landsman, *Op. cit.*, p.36.
- (25) *Lectures on Moral Philosophy, and Eloquence* (1810) in Miller ed., *Op. cit.*, p.152.
- (26) *Ibid.*, p.152.
- (27) *Ibid.*, p.152.
- (28) *Ibid.*, pp.152, 153.
- (29) *Ibid.*, pp.153, 154.
- (30) *Ecclesiastical Characteristics*, in Miller ed., *Op. cit.*, pp.80, 100.
- (31) *Lecture on Moral Philosophy*, in Miller ed., *Op. cit.*, pp.154.
- (32) *Ibid.*, p.161.
- (33) *Ibid.*, p.163.
- (34) *Ibid.*, p.163, 164.
- (35) *Ibid.*, pp.165-167.
- (36) Caroline Robbins, "When It Is That Colonies May Turn Independent:" An Analysis of the Environment and Politics of Francis Hutcheson (1694-1746)," *Williams and Mary Quarterly* 3rd ser., 11, 1954, p.216; David Fate Norton, "Francis Hutcheson in America," *Studies in Voltaire and the Eighteenth Century*, 154, 1976, p.1562.
- (37) Francis Hutcheson, *A System of Moral Philosophy: To Which is prefixed some Account of the Life, Writings, and character of the Author by William Leechmann*, London, 1755, Vol.2, Book III, pp.271-272.
- (38) *Lectures on Moral Philosophy*, Miller ed., *Op. cit.*, pp.203, 204.
- (39) Hutcheson, *A System of Moral Philosophy*, *Op. cit.*, p.308.
- (40) *Lectures on Moral Philosophy*, Miller ed., *Op. cit.*, p.204.
- (41) Collins, Tait, *Op. cit.*, pp.16, 17.
- (42) Witherspoon, "Thought on American Liberty" in *The Works of John Witherspoon*, Vol.9, Edinburgh, 1815, pp.73-74.
- (43) *Ibid.*, p.77.
- (44) Witherspoon, "Reflections on the Present State of Public Affairs and on The Duty and Interest of America in this important Crisis," in *The Works*, Vol.9., p.67.
- (45) *Ibid.*, p.68.
- (46) *Ibid.*, p.68.
- (47) Witherspoon, "The Dominion of Providence Over the Passions of Men," in Miller ed., *Op. cit.*, p.144.
- (48) *Ibid.*, pp.146, 147.
- (49) *Ibid.*, p. 147.
- (50) ウィザーズプーン以降のプリンストンの思想的状況については, Mark A. Noll, *Princeton and the Republic, 1768-1822: The Search for a Christian Enlightenment in the Era of Samuel Stanhope Smith*, Princeton University Press, 1989.

アメリカ啓蒙と宗教

- (51) Garry Wills, *Inventing America: Jefferson's Declaration of Independence*, Houghton Mifflin Company, 2002, pp.176-180.
- (52) D. H. Meyer, *The Instructed Conscience: The Shaping of the American National Ethic*, University of Pennsylvania Press, 1972, p.3.
- (53) なお、最近宗教史家のノルは、メイのいう「教訓啓蒙」を、スコットランド啓蒙（常識哲学）と共和主義とプロテスタント福音派の融合と捉えている。Mark A. Noll, *America's God: From Jonathan Edwards to Abraham Lincoln*, Oxford University Press, 2002.
- (54) 藤原昭夫『フランシス・ウェーランドの社会経済思想 - 近代日本，福沢諭吉とウェーランド』，日本経済評論社，1993。